

## シャッターを「切る」

日常、よく使うことばでありながら、突き詰めていくと、なぜ、そんな言い方をするのか、ふと不思議に思えてくるものがある。カメラの「シャッターを切る」も、その一つだ。

このことばをめぐる、ネット上にはさまざまな解釈が飛び交う。「一瞬の映像を、フィルムの中に『切り取る』から」という説もあれば、「昔、縦に落ちるシャッター板をギロチンシャッターと呼んだことから」などという物騒な説もある。どうやら「切る」ということばの意味の多様性が、さまざまな解釈をもたらしているようだ。

「切る」の意味は、実にいろいろである。辞書の中には、「ひと続きのものを離ればなれにする」という中心的な意味のほか、「トランプを切る」、「ハンドルを切る」、「スタートを切る」など、なんと31の語義を「切る」に充てているものもある。

「シャッターを切る」の「切る」が、語義の仕分けの中で、どう扱われているか。それを、日本語学習者向けの辞典まで含めて見てみると、かなりの違いがあることに驚く。「つながり、関係を断つ」という意味の中に分類しているものもあれば、「句・息・トランプ」といったグループの中に、さりげなく

「シャッター」を含めているものもある。あえて分類することを避け、「シャッターを切る」を独立した使い方として扱っているものも数多い。

そんな中、ある辞書では、「閉まっているものを開ける」というとらえ方をしていた。つまり、「手紙の封を切る」と同じだ。「シャッターを切る」は、「閉まっているシャッターを開けて、一定時間、光を取り込む」ことを表しているというわけである。

かつては、レンズのふたを外して露光させ、再びふたを閉めるまで、長い時間をかけていた時代もあったという。それが今、「数千分の1秒」にまで短縮されたとしても、また光の届く先が、フィルムから画像センサーに変わったとしても、シャッターの基本的な仕組みからいえば、結局は同じことだ。

最近、若い世代を中心に、シャッターを「押す」という言い方が増えてきているように感じる。「シャッターボタンを押す」という行為そのものに着目すれば確かにそのとおりののだが、何十年もシャッターを「切り」続けてきた自分には、ややもの足りなく響く。もしかすると、やがて、いつかはシャッターを「切る」が通じない時代がやって来るかもしれない。

田中伊式(たなか いしき)